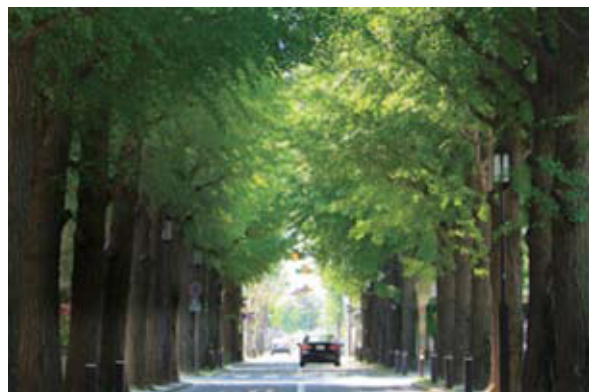


世田谷の変遷

世田谷区は東京23区の西南端に位置し、面積約58km²、人口83万人超のマンモス区です。地形的には区の南西部、多摩川沿いの国分寺崖線を境にして北東側は台地、南西側は低地となっており、崖線沿いに古代からの遺跡が多数発見されています。江戸(東京)の中心部に近かったことから、食を支える農地として発展し、明治・大正期に入ると、都心部の人口増加がもたらす市街地の膨張により、しだいに農地から宅地へと転換、都心に近く交通の便もある良好な宅地として人口増加してゆきます。大正から昭和初期には鉄道の敷設も進み、計画的沿線宅地開発の初めての例ともいわれる新町住宅地(新町・深沢)や、住民協定による住環境維持を先駆的に実施した成城といった、広い区画で整備された家並みの住宅地や、旧来の道筋のままに増殖してゆく沿線住宅地などが形成されてゆきました。

1923年の関東大震災を契機に、被害甚大であった都心部からの流入で人口増加に拍車がかかる形となりましたが、その中には26の寺院群からなる「烏山寺町」なども含まれています。昭和の大戦による戦災が少なかったことから戦後さらに人口が増加、1950～70年代の高度成長期を経て都市化が進行してゆきました。副都心化した新宿・渋谷の双方に至近で且つ交通至便な下北沢は、今や若者文化の人気スポットとして発展、駅周辺の区域では住宅と店舗が複合して変貌してゆくといった、興味深いタイプのまちが出現しています。

こうして様々な時代の潮流の中で変遷を続けてきた世田谷は、未だ良好な住環境を残しているものの、近年では中高層マンション等の大規模開発や敷地分割によるミニ開発などの開発圧力、あるいは道路拡幅や鉄道施設改造などの公的事業による環境の改変が進行し、良好な住環境の維持と創出が今日的な課題となっています。



つないでゆく建築・まちづくり

3.11東日本大震災は、まちを壊滅させ、様々な風景を消し去り、はかり知れない被害をもたらしました。住み慣れた家並を失った時、被災者の方々はそれが自分の身体の一部であったような、自らのアイデンティティの重要な部分であったことに、あらためて気づかれたのではないのでしょうか。暮らしの舞台として、背景として、地域の記憶や痕跡を蓄積し、住み継がれてゆく筈であったまちが、そして我が家が、或る日突然に失われたのです。住環境の破壊、コミュニティの崩壊がもたらす喪失感は、深刻です。

こうして今、私たちのまちを想う時、この災害から学ぶべきことは、リセットの利かない住環境を、継続・蓄積し、補充・融合し、ときには有益な刺激を加味しながら、昨日から明日へとつないでゆく建築・まちづくりの大切さです。



2050年の私たちへ

JIA世田谷地域会は、地域住民として地域に固有の課題を注視し、様々なまちづくり活動や情報提供の機会に参加し、専門的知見をもって良好な住環境の維持と創造に寄与すべく活動をしています。

2006年の発足以来続けているこれらの活動は、今回の災害を経てその必要性が再認識され、今後も継続されてゆきます。

●教育機関との連携による空間ワークショップを行い、次世代の担い手である子供たちとのコミュニケーションを図り、まちや建築について伝えてゆきます。

●有形無形の地域資産の価値を紹介し、保存再生を働きかけてゆきます。

●公共的プロジェクト等に際して、良好な環境計画の提言をしてゆきます。

●行政と連携して、災害に強くしかも住みやすい、魅力的まちづくりをめざして活動してゆきます。

そして今、福島原発事故を経て、さらにエネルギー問題を包括した、住環境の新しい段階の模索へ進みつつあります。



会員名簿				(代表)											
泉山聖威	市原出	上浪寛	美寛	青柿	野崎	達豊	司治	鰐勝	坂又	徹明					
金山眞人	国広ジョージ	黒木実	孝博	郡澤	山貞子	一峰	郎雄	郡田	山喜男	正二					
小辻武	阪田誠造	酒井中	洋誠	田野	邊沢	正光	克則	島中	田彦	根賢					
清木村	尺田隆志	南條	成雄	松家	本敬										
中廣村	長柳	藤倉忠雅	山寄雅雄												